京都造形芸術大学紀要一八号（二〇一三）の発行にあたって

本学が発行する紀要には、広く人びとの目にふれた作品の報告があり、長年にわたる研究成果をまとめた研究論文があり、また日頃の活動から生まれた研究ノート、評論、エッセイなど、また、ときには退職された教員の所感も掲載されています。そのどれもが力作で、本学のキャンパスの内外での活動の様子を、この紀要でくわしく見ることができるものです。地域社会への貢献として本学の学生や教職員によって繰り広げられるプロジェクトの様子や、さまざまの企画の姿を読み取ることができる報告がたくさんあり、それらをじっくりとご覧いただきたく存じます。

京都造形芸術大学の建学の理念は、人間館の入り口に立つ藝術立国の碑に刻まれており、学生たちは毎日、その前を通って通学し、その碑の前で作品を展示し、映画を撮影しています。建学の精神は、学生たちに向かって、あるいは教職員に向かって、人間とは何か、芸術とは何か、文明とは何か、平和とはどういうことかと問いかけています。芸術活動の中で、その問いかけに対する答えを、意識的にあるいは無意識に求めながら、みな作業を続けています。その結果の一部が、この紀要に編集されているのです。

この巻頭言を書いているとき、ちょうど藝術立国の碑の前や、学園のさまざまの場所で、本学の一回生による「京造ねぶた」の制作が始まったところで、キャンパスはたいへんな熱気に満ちています。今回の紀要には、本間正人、箭内新一、銅金裕司による「大学新入生の創造力と人間力を引き出す体験授業――マンデイ・プロジェクト、ねぶたプロジェクトの意義を総括する」という内容も掲載されており、本学の教育の特長の一端を読み取っていただくことのできる企画となっています。

本学の芸術文化情報センターは、京都文藝復興と日本文化再生をめざす教育研究活動の基盤となる施設として、人間館の地下一階にあり、そこが運営する学術機関リポジトリに、この紀要も、二〇一二年に発行された第一六号から収められています。それらも含めてご高覧いただき、ご批判を賜るようお願いして、刊行のご挨拶といたします。

二〇一四年一一月一〇日

京都造形芸術大学学長　尾池和夫